

やまと心の深層

はじめに

大陸諸民族は原始古代いらい常に異民族と接触をくり返してきた。その接触による対立・抗争・征服などが民族意識を成立せしめ、民族文化や団結心などを育てるとともに、他国民に対する対応の技術、外交の話術や技巧なども発達せしめたのである。

東アジアの弧状列島に縄文いらい生活文化をいとなむ民族は、海外の異民族の動向に根本的な影響をうけることなく、もっぱら島嶼内の和合と永続に専心することが可能であったといえる。

この島嶼棲息民こそが日本人であるが、縄文いらい一万年、

山上伊豆母

彌生いらい二千年の文化を伝統するにかかわらず、みずからの文化の特色や本質、民族性の長短を明確に自覚しているかという、すこぶる疑しい。その理由はやはり、海外異民族との接触が乏しかった歴史地理事情によるものである。有形無形あらゆるものの認識において固有の名称を付することは、他との比較によって始めて可能となる。他民族との対比なくして、数千年の孤島文化を把握し表現することは極めて困難といえよう。島嶼民族じたい固有文化を確認し自負意識をもつ以前に、海外の異文化思想に驚嘆し、他民族の宗教や芸術を憧憬した。他国異族との折衝による文明の取捨という過程の経験に乏しいため、好奇・憧憬の心情が先行して、異国文明に接近し競って模倣する営為に流れたのであろう。

論題にかかげた「やまと心」にしても、民族精神の基底を志向する要語にかかわらず、その初見は意外に新しく平安後期以降。藤原隆家のことを「大鏡」が語るところ¹⁾。

大式殿、弓矢の本末も知り給はねば、いかがおほしけれど、大和心かしこくおはする人にて、筑後、肥前、肥後九州の人を興し給ふをば、さるることにて

初出の「大和心」は、どちらかといえば実務処理の才智を語るようであるが、その他の用例も稀少である。前述したごとく、他国交渉が乏しかった史因から、とかく民族意識の高まる機会に恵まれなかったためであろう。「万葉集」「人麿歌集」に²⁾

神ながら 言挙げせぬ国

と宣言しながら人麿は同じ長歌で

然れども、言挙ぞわがする

と抵抗をしめし、「反歌」には

やまとの国は、言霊の幸はふ国ぞ(三二五四)

と宣り直している主張は意味深長である。「言あげせぬ」とは、みずからの心意を高言に壮語しない、相手に対して異なった考えを述べぬ方がよい、自分の思考は小声で言い大声で宣言はせぬ、などの内容をふくむと考えられる。これらの発言や会話における処世技術は、まさに島嶼民族共同体内に発達した生活の

知恵であって、対異民族や海外交渉には通用しないというべきであろう。

人間の思想文化はすべて言語化されるものであるが、自他の心意の同一性・相似性の信憑を数千年伝続した民族は、発言や対話が単純化し過少化する。「以心伝心」とか「吐芸」とかが珍重される。詩文芸の永い歴史においても、その主流は万葉集の「長歌」から古今集の「短歌」へすすみ、さいごに芭蕉の「俳句」という十七音の世界最小の定型詩に至ったといえる。

一、島嶼の精神風土

みずからの心情・精神を名づける「ヤマトゴコロ」の語の初見が比較的新しい理由は先にふれたが、他の原因に固有ヤマトコトバの性格にも存するのではないか。つまり、ヤマト言葉に抽象的事象の表現語がやや乏しい故かと考えられる。たとえば人間根本の「生・死」、基本倫理の「愛・憎」、時間原理の「過去・現在・未来」などに相当するヤマト語が即座に浮かばないのは、不可思議といえよう。それらは漢語と発音の方が一般に普及し日常化したためであるが、その理由は単純でないように思われる。

第一に、ヤマト語に抽象名詞がやや乏しいことは既述したが、第二に日本語の構造の特色から、他國語の名詞体言が容易に主語や目的語に挿入することが可能である性格が挙げられる。ゆえに、必要あらば自由に他國語名詞を使用して会話や作文を進めることが出来る。第三に、抽象名詞が豊富と言えない國語では、時と場の個々の現象に感得する抽象觀念を言語化するとき、形容詞や動詞を使用して表現する傾向がよい。例えば漢語「生」は生命を示すが、固有表現では「ウ(生)ム」は生の發生を指し、活き活きと生きる状を「オ(生)フ」といい、「イキ(生)ル」はむしろ「イキ(呼吸)する」状態なのである。つまり、抽象名詞の少ないことは逆に、眼前の現象に対してあらゆる形容詞や動詞を駆使し、複雑で繊細な表現や描写をおこなうゆえに、全体のボキアプライはすこぶる豊富になっている。「死」の漢語は代表的に一つであるが、ヤマト語においては呼吸停止をしめす「息去ヌ」からはじめて、人間の総体が眼前から消去してしまう状態の「身罷ル」が中下層階級に用いられ、上層貴族・英雄や神人には神仙化する意味をこめて「神アガル」の敬意をこめた表現が用いられる。宗教やモラルの原点である「善・悪」にしても、むしろ芸術的な「ヨシ・アシ」とか「キヨシ・キタナシ」の形容詞であらわす。倫理の基層である「愛・

憎」もヤマト語では、「ウツクシ・カナシ・ニクシ」などの鑑賞的表現となり、普遍的な絶対愛は少ない代りに、現実に千変万化する愛憎の場を用言により巧みに表象する。

善悪が固有語脈でやや曖昧であることは、その背景として古典神話に「善神と悪神」が明確には存在しないことであり、したがって本来の民族信仰には理想の「天国」と逆境の「地獄」という二元觀念は見当らないのである。一般に普遍的世界宗教上の課題として「神と悪魔」がある。しかるに、この國の原始信仰ともいふべき原神道には、おどろくべきことに「悪魔」がない。しかも、死者が安樂を極める「天国」や、罪を苛まれる「地獄」も見あたらない。「ヨミの國」はただ暗闇の古墳の石室にすぎぬ。これは如何に解すればよいのか。

悪魔がない原因は、それと対応する一神教的な絶対神が存在しないためと考えられるが、それでも人生に災禍をもたらすような運命的因由は「マガツ神」と呼ぶ。神代「記」には初めて中瀬に墮り被きて濼ぎ給ふ時に、成り坐せる神名は、八十禍津日神(中略)その禍を直さむとして成り坐せる神名は、神直毘神、次に大直毘神……

つまり、日本神話における善・悪のカミに相当するのは、真ッ直^{ナカミ}なカミと、彎^{マカミ}曲る^{カミ}カミとであり、まるで電線のように、

不善なマガツカミもその曲状を正しく直せば、容易にナホビの神の正直な状に戻る性善論といえる。マガツ神も絶対的な禍魂や悪魔でなく単に曲がっているのみで禊祓みそぎによって直神になりうるという再生信仰が存在する。大陸宗教における極楽と地獄、神と悪魔といった二元律は絶対的に相容れない倫理観であり、それを現世に適用すれば善人と悪人、また善国・悪国とも解されて対立抗争の因ともなりうる。わが倫理観である「直・曲」意識は相對概念であるから、民族統合や文化継承のたすけになったのであろう。この国の民族性について、欧米の能動的積極性に対して受動的消極性があげられる。一方では前者の父性的志向に比すれば母性的傾向も指摘されている。

それらの問題も、たんに近世以降の封建制や鎖国思想のみを重視するのは不正確であり、前述のごとく弥生文化それ以前からの島嶼風土に培われた史因を勘案すべきと思う。民族の性向が積極的というよりも消極的であるのは、四周の海洋の防壁によって攻撃の目標が存在しなかったからであろう。父性的よりも母性的といわれるのは、この矮小な列島の自然が想像以上に豊沃であり、海外に進出する以上に国内の農水産による自給自足が可能であったことによる。農耕は本来女性原理であり、遠征する狩猟は男父の生産型式だからである。

能動積極とみられた民族が得てして国内が貧困であり、男性的な海外雄飛の名で生産取得の進攻を試み、軍事力をもって領土拡大を計って宗教文化さえ輸出したことは史上に知られている。自給自足を原則として、海外から輸入するのは宗教や文化のみであった日本史の母性体質は、近代以前はまことに平和国家の象徴というほかはない。古代呼称を「豊葦原瑞穂國」とよばれて二千年余の水稲農耕の歴史を有し、「海幸・山幸」の諺のとおり、国土大半の山林と広汎な木材生産や、河川湖沼・沿海の水産に恵まれた民族は、宗教思想においては原始アニミズム、いわば多神教的傾向にあった。古典ではこれを「八百萬神」と呼ぶが、一神教的宗教学から観れば、とかく「無神論」のように誤解されやすい。注意すべきことは、それは決して「無信論」でなく、日本人は「一神」を信じていることがなくとも、神・儒・仏・祖・基の何かを必ず「信心」している民族性を有つ。

二、保守と進歩の極

歴史の通念である「時代区分」について種々な方法が存するが、これを歴史民俗学の観点からみれば区分の把握方法について疑問が残されている。一般常識は年表の一万年前は縄文に入

り、BC三世紀頃からAD三世紀頃は弥生、四世紀頃から古墳期に入る知識が通用している。しかしながら、以上のような時代区分は、時代の上限はほぼ明らかに示しているけれども、その下限を正しく指していないのではないか。弥生期の地層からも縄文土器は伴出されるであろうし、古墳遺跡にも弥生土器が発見されても不思議ではない。また倭五王時代に弥生式の生活を継続している地域の存在を否定することはできないと思う。

そもそも時代区分とは、現代を基点として過去の歴史を見渡す尺度の単位と考えることができまいだろうか。時代の下限を切ることなく、縄文は一万年単位、弥生は二千年単位で日本史の根幹を通観でき、世紀は百年単位で細部の時代特質を把握しうる。「鍛倉・室町」などの首都名区分は、政治経済よりはむしろ文化・風俗の呼称ともいえよう。時代区分を歴史通観の尺度と考えるならば、縄文単位を用うると、現代もまだ縄文の最末期であり、同時に弥生の二千年単位ではその終末に相当するともいえる。その証左としては、現代日本人の骨格は一万年前から縄文の「原日本人」につながっており、その時代に縄文人が創作した火炎土器と同系の民芸土器が、今も製作せられ珍重されている。現今の政界さえ賑わす問題の米種、わが名産となる絹糸・機織・木工なども金属器とともに弥生期に開始されたゆえ

に、今はその末期とみてよい。

時代区分を巨視的に見るか微視的に眺めるかの課題のほか、時代史観を年表的に直線状に考えるか、循環的あるいは螺旋状に考察することもできると私は思う。たとえば、世界の注目を集める浮世絵は近世美術、絵巻の傑作は平安末などと時代区分するよりも浮世絵は古代末美術の回帰復活とみる回帰史観も不可能ではあるまい。世紀単位の史観、首都名の時代文化も必ずしも正確に該当時代の社会文化や風俗の総体を現しているといえない。すでに指摘されているが、「咲く花の匂うが如く・青丹よし」の平城京、天平文明の粋を集めた正倉院御物と、大仏造営で逃散した貧民の生活は何の関わりもなく、文化の落差は時代差の一、二世紀どころではあるまい。

さきに、直線史観か螺旋史観かというテーマをあげてみたが、浮世絵が古代絵巻の回帰復活という見方をはじめ、日本文学史の金字塔である『源氏物語』は狭い宮廷を舞台として夢幻のロマンを描き、そのステージを近世遊里に移して開花したのが西鶴文学かもしれぬ。忠臣蔵の武士道と、源平武家とは天地の相違があるが、江戸期の床の間に義家の掛軸が掛けられた。一時代に複数の時代が存するという「並行時代史観」が考えうると私は思う。

先述の一万年単位史観では現代も縄文末であると共に、弥生の単位ではその終期さらに二十世紀末と、並行史観が可能となる。巨観的単位は地学で早くから行われている。ブルー・タウトが世界に紹介した日本建築の典型・伊勢神宮の原型は、銅鐸に刻まれた高床式天地根元造であるから、木造建築史は二千年を単位として考えることができよう。時代区分について上限のみ注意され下限が曖昧と述べたが、その下限が消失するものではなく、次時代に残留・堆積されるのか、回帰・復活するかは今後の課題であろう。

文芸において、もっとも長大な伝統と広がりをもつものに「短歌」がある。説くまでもなく最古の古典たる『記紀』歌から奈良・平安に全盛を誇り、中・近世から近現代まで生きる民族詩といえよう。しかも、階層からみても天皇の実作から、反体制の人民短歌に至るまで全く差別がない。しかも、その短歌をさらに圧縮して世界の最小定型詩「俳句」を生み、海外諸国で流行していることは、日本文化の循環性であり、最古の保守文化と最新の進歩性との、両極の共存ということができよう。同日に論ずることはできないが、千数百年の天皇史や宮廷文化を継承し、神儒仏の宗教伝統を温存する一方で、現代科学の超テクノロジーにおいて世界の先端に位置するこの国は、まさに

保守と進歩の両極の構造を並存せしめる文化圏といえる。

三、内外・上下の構造

言いふるされた節分の豆撒きの呪言に

福は内、鬼は外

という口上がある。その前月の「七日正月」には台所の真魚板を据えて、上に春の七草と包丁・火箸など金物を飾り、連木で短板をトントン叩きながら、家族で唱和する民俗の伝承呪歌は

唐土の鳥が 日本土地へ

渡らぬ先に 七種・齊 七種齋

という謎めいた歌詞は何を意味するのだろうか。まず言えることは、原始古代より島嶼民に牢乎として伝統する「内と外」の觀念であり、その深層心理は既述の孤島風土によって縄文・原日本入いらいと考えられる。古代から継承される「イへ(家)」「共同体意識」と、求心的志向のウチ理念が融合して、「氏」族社会が形成されていった。近世封建時代になり「お家大事」思想や、「譜代」と「外様」の大名区別も、ウチ・ソト慣習をたぐみに利用した統治政策であったといえる。それは庶民の風俗のなかまで根強く「二足制」民俗として遵守されており、和風住

居はもちろん洋風であっても、日本では外足のままでは原則的に屋内に入らない。

内外観念に対して、上下(タテ)概念はルースベネティクトの『剣と刀』に強調されたように、はたして強固であろうか。結論から先にのべると、大陸諸国に比べて上下の階層意識は決して強固といえないと考へる。「土農工商」と呼ぶ近世身分制も、各階層間に酷薄な差別や掠奪が存したのではなく、むしろ幕藩体制維持のための世襲制を安定化する手段であり、それぞれの身分内部においてはヨコの自由もひろく存在した。

さらに最近の研究によれば、表面的に厳存している土農工商制も、裏面の婚姻縁組はかなり自由であつて、とくに近世盛行した「養子縁組」制により、各身分間の通婚の例は多く、「家」の体面には上下が存するが、血統の交流からは四身分の上下観が意外に稀薄であつた。戦国時代に政略結婚と呼ばれた家同志の婚姻も、たんなる政略のみではなく階級観を超えたウチ・ソトの平等感も否定できない。この伝統はじつに古代氏族制にさかのぼり、当時の賤民と目された「奴婢」も「良民」と婚すれば「良民」の籍に入ること。永い律令制、封建制をもつ日本史に、諸外国のごとき奴婢制の見当たらぬことも、タテ社会の強調を否定する根拠となると思う。

史上にいわゆる典型的な革命、庶民大衆が蜂起する大乱もほとんど見当たらない原因は、極端な独裁や収奪の統治が少なかつたためであろうか。民衆意識に上下タテの階級観念が薄く、それよりもソトからウチを守ろうという求心的民族性が強固であつたのだろうか。『古事記』の出雲系神話にネズミの発言として、

内は富良富良、外は須夫須夫^{スツツツ}

とあるのは、外は野火の燃えさかる焼野からオホクニヌシを救出して、安全な洞穴内に招くという意図を表わすから、結局はソトは危険ウチは安全という島国原理の、もつとも早い記事であろう。民族内において上下意識を寛和せしめた最大の要因は、永い歴史によって培われたイへ(家)の祖先意識の強弱さに外ならない。現代も祖先祭に際し名家・高官も新入社員も益々正月の行事を無視しうるものは稀であろう。満員の交通機関に故郷の土を踏むのは、生存の祖先(親)と死せる親(祖先)にま見えるためである。その空間(故郷)と時間(祖先)によって作られた系図であっても祖先が公家・武士や貴族にもつながり、現世の階級の上下を一時でも忘却してしまふ。

この国独自の「祖先教」はもつとも単純化すれば「オヤ・コ」教であつて、むろん親は上位で子は下位であるにかかわらず、「祖孫一体」という語がある通り、互いに上下階級感をも

たない。祖先観は数百年の年代を超えて、隠れた偉大なオヤと今の自分を一体化するゆえに、現実社会の上下観は稀薄になる。だが、この民族宗教ともいふべき「祖孫一体信仰」は、現実の「家（庭）中心教」に発展してゆき、極端になれば先祖依存症候群に変容するかもしれない。変容した祖先教はことさら自家を誇って他家を差別し、家系・学閥・閥閥・政閥などを処世の法に利用しようとする弊に陥ることもある。

ただこの国の人間が最もつよく意識する内外観とその障壁を超える絶好の手段があり、「縁組」と称して古代から現代まで用いてきた。「新撰姓氏録」にみえる大王家をめぐる豪貴族の血縁、江戸から近現代の財閥・政閥の縁組など。婚姻によって「赤の他人」であつた両家は、たちまち「身内」となる。おなじ手法で会社員は、企業との契約観念よりも、「ウチの会社」、学徒は「ウチの学校」と唱え、その会社の社風とか学校の校風などは、お家大持の「家風」とすれすれの伝統といえるであろう。その「イへ（家）」理念は疑似同祖共同体とも呼ぶるので、他企業や他学校は「ヨソ者」と思惟されるのであるが、系譜をたどると島嶼内の家系・血縁・閥閥などは複雑に絡んでおり、婚姻・転職などで「イへ」共同体に入ると、その日から「身内のもの同志」に変じ、「昨日のテキは今日のトモ」と祝杯

をあげるのであろう。

四、平衡の民族心理

近代企業経営のなかで最も難しいのは人間関係といわれるが、世界の企業中にヒューマンリレーションが一番スムーズなのは日本企業といわれる。その理由は先述のように、幹部と部下とが接触を重ねると「オヤ」と「コ」に似た感覚となり、擬イへ（家）共同体として「ウチの会社」になるからという。民族心理をさぐるばあい、民族語の特性を忘れてはならない。ヤマト言葉は国際的にも独特の性格・構造や表現を有することは一章に述べた。無意識に用いているが、話す主旨の肯定・否定が文章の最後に位置し、それまでは長いセンテンスでも諾・否は不明なことが多い。

その文法（言語慣習）は、個人間の会話から国際的な外交会談に至るまで、意志を即座に相手に察知させることを困難にする。それは言語表現の曖昧性となって相手を苛立たせる欠点もあろうが、反面には対人関係の性急な断絶を避ける効果もある。YES・NOの不明な進行の間に、立場の異なる相互に共通点を見出し、ときに妥協や同意に達して伝統「和」の精神が生き

る幸運もある。だが又、ほんらい個別の人格をもち、ときには異質の歴史をもつ異国人同志が、ある課題について談合するばあい、同様の名詞形容詞を使用しているさいも、そのテーマに対する感覚や認識の微妙な差異は、双方で意外に大きく隔離しているかもしれない。

つまり場合により相互に誤解のままで、一部の共通点によって全面的に合意のごとく錯覚することもある。安堵の数日の後ふたたび会谈の時、双方の理解が前日と相違することに気がつき談合が決裂するような例は、合意点に対する錯覚や誤解が存在したとともに、根本的には日本語の曖昧性が影響したかもしれない。その曖昧性の一特色に、既述のごとく体言・用言のうち、用言はほぼヤマト語を伝統するけれども、体言は外来語をも自由に使用する習慣である。古代ではまず漢語や仏語を用い、近代以後は英語や欧州語のカタカナ語を主語や目的語に用いて怪しまない。この外来語と翻訳した日本語には、それぞれ微妙な相違が存するのであるが、日本人は平気で曖昧性に寛容であった。

民族語の問題で付言するならば敬語の問題がある。世上教育関係さえも、日本のみに存在する敬語は封建的な上下階層の差別観の影響と見る向もある。だが小論ではやや趣を異にする論

点に立つ。敬語はその使用を“免罪符”として上層下層が自由に会話することができると便利語であり、タテ構造をヨコ意識に変容する日本人の知恵と私は考える。欧米先進国では強固な上層下層の階級社会が成立したために、会話交際は主として同階級内部で行われ、上下の会話は僅少であり、ゆえに敬語のような“上下交渉語”は発達しなかつたのでろう。

「菊と刀」らしい注目されている「タテ」と「ヨコ」の通用語も、その内容を再検討してみると複雑な見地に分かれてくる。その社会の歴史経過を分類してみると、現在の国家組織の構造を比較する見解、またその民衆生活や民俗意識の相違などで、大まかなタテ・ヨコ観はかなり逆の認識が生じることは、前述してきた通りである。本題の「ヤマト心」とは如何なる位置に存するかと問われれば、その判断は難しいけれども、この民族はつねに物事の平衡を好み、タテとヨコの中央を求める習性を有してきたと考えられる。

いく度かかき濁しても澄みかへる

これぞ御国の 姿なるらむ

と明治の八田知紀の古歌は、現在も通用すると思われる。私見によればこの国の歴史は、過・現・未の直線史観というよりも、循環・回帰の史眼によって解き易いと考えられる。この日本史

観のよって来るところは、何よりも民族の自然観自然信仰にもとづく影響が大きい。先学の指摘が多いが、山紫水明や白砂青松の風光は、春夏秋冬の四季ごとに景観が著変し、一年周期に同じ景色に回帰する。かかる島国では歴史時間は過現未の直線よりもむしろ四季の循環で螺旋状に進むのかも知れない。『記紀』神話をはじめ、国民詩である短歌や俳句も四季の時間により、民俗芸能もまた多く春秋の推移や波風を奏でている。

おわりに

『万葉集』卷十六「厭世間無常歌二首」に

世間の繁き仮處に住み住みて

至らむ國のたづき知らずも(三八五〇)

という二首目の短歌の作者は不明であるが、詞書の如く「世間の無常を厭う」人で、後書きは「右の歌二首は河原寺の仏堂の裏に、倭琴の面にあるのなり」と記されている。奈良時代成立にかかわらず「記紀」とくに「古事記」には寺院記事や仏教臭がほとんど見当らず、倭五王以前の神話伝承、原神道思想がゆたかである。やや後れて同時代の『万葉集』は趣が一転して、王朝最盛期文人の儒仏思想が臆面もなく詠み込まれ、仏教諦観

の名作の多いのは興味ふかい。前掲短歌も謠人不知ながら秀作であり、その底流には明らかに仏教思想が看取できるが、その宗教観を表面に出さず、現実の質素な「仮處」（あばら屋）はかりに豪邸にしても浮世の「仮宅」であり、仮の世の活しを繰り返し（住み住みて）、終にこの世に厭いて理想境（至らむ國）へ行きたいのだが、いざとなると行き方（たづき）がわからない。諦観を下敷にしなが、現実感覚をオドケた表現で歌っているのは高度な諧謔歌といえる。

さらに注目すべきは、この思想歌が河原寺の裏の「倭琴面」に書かれていた事実である。「ヤマトコト」については、以前に「古事記」の「神語・天語歌」の「ことのかたりこと」について考察し、滋賀県服部遺跡からヤマトコト出土にさいして報告した。固有のコトは五絃ないし六絃であり、降神楽器として、原始古代の巫俗儀礼にあたり、降神する巫女が「神語」する場合に伴奏の必須楽器がヤマトコトであったのは、『記紀』の神巧皇后の条でも明らかである。以上のような固有信仰の原神道楽器に、異教の他界観を習合させた倭歌を記した、匿名の歌人はかなりの知識層であったに相違ない。

明治西欧文明の流入は、飛鳥天平の隋唐文化の導入と比較すると、かなり異質的であり大衆社会に与えた影響は測り知れぬ

ものがあつたと私は思う。前者は「和魂漢才」であり、後者は「和魂洋才」と一般に称せられるけれども、「漢才」は律令社会上層の知識人に流行したけれども、庶民大衆には知識・風俗ともに著しい変化を与えなかつた。ところが「洋才」の方は近代物質文化の裏付けを伴つたゆえに、たちまち大衆社会化して衣食住の風俗文化となつて蔓延した。すでに指摘されるように、明治の国家が輸入しようとした西欧文化は本来精神文化と物質文明が一体のものであり、形而上は古代ギリシヤからキリスト思想まで含み、形而下は近代科学産業技術なのであつた。しかるに一般大衆がもっぱら導入したのは物質文明が中心であつて、精神文化はほとんど顧慮されなかつた。したがつて、千数百年の歴史に継承された神儒仏などの民族信仰と、異質ともいえる西欧の一神教倫理とは、対決や習合の場を経ぬまま並存の形で現代に至つていたのである。

ゆえに、ウチ・ソトの伝統哲学と、イヘ(家)の歴史理念は、社会構造の上層から底辺まで普遍し依然として基本となつてゐる反面、近代国家として表面の体裁は民主主義であり、自由平等を立前とする。従つて、家庭内において神仏壇に礼拝し墓参りを励行させられる子弟が、学校の間では基本的人権・男女平等や科学万能思想を教育せられて怪しまない。ふるく明治維新を

わが国最初のブルジョア革命する見地も存して、文明開化・脱亜入欧のかけ声により、断髮廢刀や洋館洋食が流行した反面に、維新の思想的スローガンは「神武創業」への「王政復古」が唱えられていた国民思想の並行状態は、そののち近代史を通じて現在も継続し解決してゐないのである。

注

- (1) 「大鏡」第四卷「内大臣道隆」の条
- (2) 「万葉集」卷第十三「柿本朝臣人麿歌集歌曰」
- (3) 「古事記」上卷オホナムチ神の出雲訪問の条
- (4) 拙著「古代祭祀伝承の研究」(「ことのかたり」の系譜)
(昭和48、雄山閣)
- (5) 拙稿「六絃琴のロマン―滋賀服部遺跡の出土品から」
(昭和51年8月11日・産経新聞)